

翻訳という世界



船越 隆子
翻訳家

分からない。それでも、自分なりに感じ取ったその作品の雰囲気なるべく出せるよう心がけている。

小説の地の文、映像でのナレーションの口調は、作品全体の性格を決定づける大切な要素となる。けれども、そこに登場する人物

がどんな言葉をしるべきかは、それ以上に大きいかもしれない。言葉遣い一つで、その人の人となりまで決めてしまう場合もあるのだから、翻訳者の責任は重大だ。

たとえば強い訛りのある英語をしるべき男を、大阪弁のおおちゃんに例えるお医者さんには特有の言葉遣いがあるだろうし、八か、東北弁で朴訥としるべき百屋の主人にもあるだろう。山の手の奥さんと、下町のおかみさんとも違うだろう。

そして、同じ人でも、場所や相手が変われば、言葉遣いも変わる。会社の上司に報告をすると、合コンで女の子としゃべるときでは、もしかしたら別人くらいに違つかもしれない。

日本人であり、英語圏で育ったわけでもない私が翻訳をする際、作者の意図する本当のニュアンスをどこまでくみとれているかは

分からない。それでも、自分なりに感じ取ったその作品の雰囲気なるべく出せるよう心がけている。

小説の地の文、映像でのナレーションの口調は、作品全体の性格を決定づける大切な要素となる。けれども、そこに登場する人物

がどんな言葉をしるべきかは、それ以上に大きいかもしれない。言葉遣い一つで、その人の人となりまで決めてしまう場合もあるのだから、翻訳者の責任は重大だ。

たとえば強い訛りのある英語をしるべき男を、大阪弁のおおちゃんに例えるお医者さんには特有の言葉遣いがあるだろうし、八か、東北弁で朴訥としるべき百屋の主人にもあるだろう。山の手の奥さんと、下町のおかみさんとも違うだろう。

そして、同じ人でも、場所や相手が変われば、言葉遣いも変わる。会社の上司に報告をすると、合コンで女の子としゃべるときでは、もしかしたら別人くらいに違つかもしれない。

日本人であり、英語圏で育ったわけでもない私が翻訳をする際、作者の意図する本当のニュアンスをどこまでくみとれているかは

分からない。それでも、自分なりに感じ取ったその作品の雰囲気なるべく出せるよう心がけている。

独特の訛りに困惑

英語版「あるでないで」

〈4〉

心配といえば、もっと深刻な「心配」にぶつかったこともある。人物像云々を言う以前に、その人の話す内容が理解できなかった。以前に担当したドキュメンタリー番組の仕事。オーストラリアの街角で女性が引きとめられ、インタビューに答える場面だった。彼女は、オーストラリア英語独特の訛りまじりでペラペラとしゃべっているのだが、訳そうとしても内容がさっぱり頭に入っていない。その質問に対して「Yes」と言っているのか、「No」と言っているのかわからなかった。

そこでは、その言葉を文字に起こした台本を読み、文法的に意味をたどってみたい。けれども、話し言葉だから文法も曖昧で、やはり分からなかった。結局は、前後のナレーションや、彼女の表情からくみとって訳をつけるしかなかった。もちろん私の英語力不足というところもあるだろう。でもその時、ふとある徳島弁が思い浮かんだ。それは「あるでないで」。

この言葉、私たちが徳島県人にとっては聞き慣れた普通の言葉だけれど、県外の



イラスト・青木 寛司

人にはそうではないようだが、表現したいこと

「感じ」をよく伝えてくれる場合が多いように思う。たとえば、何かができな

「この「よう」に該当する言葉が、標準語には言

「この「よう」に該当する言葉が、標準語には言

「この「よう」に該当する言葉が、標準語には言

「この「よう」に該当する言葉が、標準語には言

「この「よう」に該当する言葉が、標準語には言

方言の雰囲気 どう表現？

「あつた。あれ、と気がついた。文法 いろいろなものを訳して

「あつた。あれ、と気がついた。文法 いろいろなものを訳して